



婦人と子ども

第四卷第四號

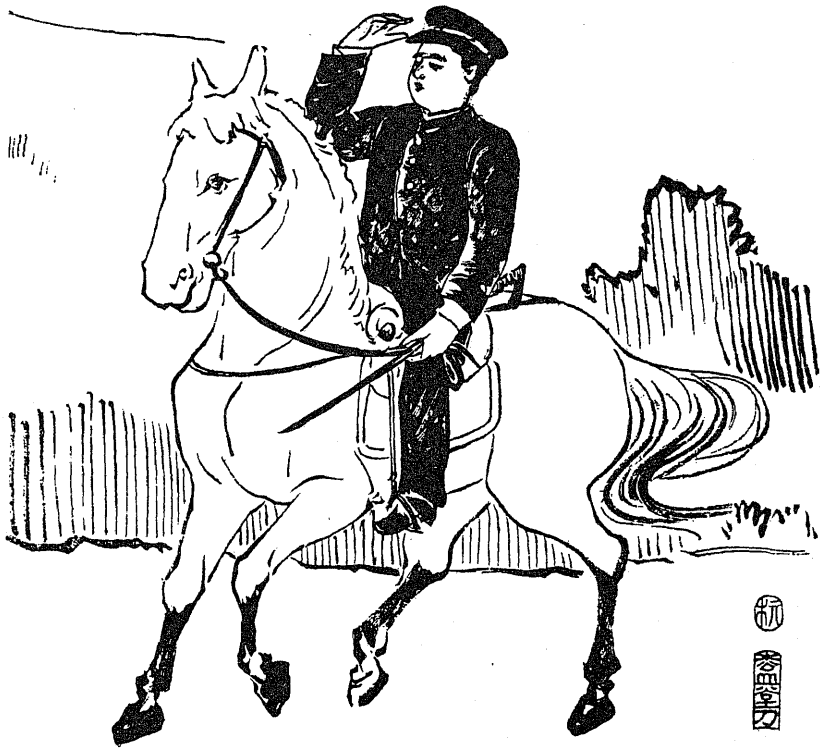
生命の水 (つゝき)

やまとの翁

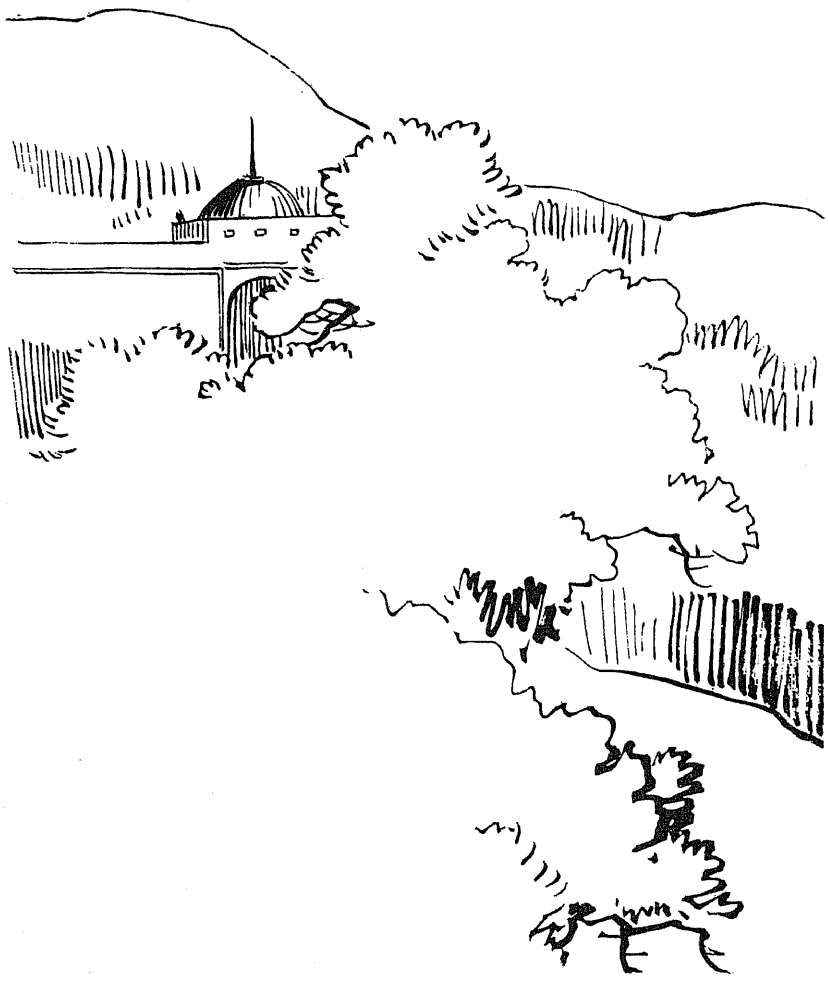
そこで、三郎は厚く一寸法師に
御禮を申しました上、鐵の杖と、
二片の麵麩とを受け取って、道
を急いで、やって参りますと、
とーく山の奥のくずつと山

奥に當つて、大きな立派なお城のたつて居る處へ來ました。

「ハ、ー、一寸法師の
いった魔城といふのは、
この城のことだな、仲
々大したものだ」と考へ
ながら、近くへよつて
見ますと、なる程、丈
夫な鐵の門があつて、
しつかり閉つて居る。そ



こで、三耶
 は、例の鐵
 の杖で、輕
 く三度たゝ
 いて見た所
 が、不思議
 にも其門は、
 靜に、左右
 へ開いた、
 『みてこそ』と
 思つて、す



ぐ其門を通り抜けると、今度は驚いた、大きな牡獅子が、しか
 も二匹まで、眼を光らかし牙をむき出して今にも跳びかゝらう
 といふ勢で構へて居ります。然し三郎は、かねて聞いて居た事
 だから、すぐと、ポケットから、二片の麵麩を出して投げ與へ
 ますと、これも不思議に音なく静まつて仕舞ひました。
 夫から、だんくと、數知れぬ部屋ぐを通り抜けて、進んで
 行きました所が、其立派な事といつたら、とても他では見る事
 も聞く事も出来ない位なものです。しかし、不思議な事には、
 人といふものが一人も見えません。けれども、そんな事を不思
 儀がって居る譯にも行きません、どーでも、こーでも、十二時
 前に茲を出なければならぬんですから、一切、他のものには

目も付けないで、そこか、こゝかと尋ね廻つた末、とゞく立派な中庭へ出て來ました、其處には眞中に奇麗な井戸があつて、そこからして冷たい、すき通つた様な水が、噴水の様に吹き出して居ます。そして、側には

いのちのみづ

と書いた立て札が、たつて居ます。

『これだ』と、三郎は、嬉しさの餘り、吾を忘れて叫び出しました、たが、やがて用意の瓶を取り出して、夫に一杯此水を詰め込みました、夫から、時間はと思つて見ますと、もし、十二時には二十分しかない『これは大變、後れては一大事』と思つて、大急ぎで、鐵門を飛び出しました、片一方の足が、やつと出て

しまうか、しまはない中に、十二時がなる、同時に、ピシヤ
ンと門が締つて其爲めに、出し後れた片一方の足の踵の肉が、
少し許り、門の扉で、そぎ取られました。

然し、先づ無事に、生命の水を取つたのですから、夫位の事は
何でもない、大急ぎで馬に飛び乗つて、元の道へと引つ返しま
した。

すると、前と全じ所で、又一寸法師に出遭ひましたから、三郎
はいきなり、馬から下りて丁寧に禮を申しますと、一寸法師も
大變喜んで、『夫では早く歸つて、お父様に飲ませるがよい』
と言つたなり、行つて仕舞はうとしますから、三郎は狼狽て
『ありがたう、併し、私の兄さんたちは、今何處に居るのでし

よー』

と尋ねますと、一寸法師は

『フーン、あの二人が、失敬な奴だから、咒咀って仕舞って、山の間で動けない様に立ちすくませて居る』

そこで、三郎は、いろく兄様たちの爲めに、お詫をしました所が、どうかにかこうにか、宥してくれる事になりました、其咒咀を解いて呉れました。そして

『併し三郎や、あの二人には善くお氣を付けなさいよ』
と言って置いて、何處へか行って仕舞ひました、

暫くすると、太郎丸と次齋とは、丸で夢でも見た様な心地で、其處に歸つて來ました。そこで、三郎は、一々其譯を語つて聞

かせて、夫から、自分が一寸法師のお蔭で、魔城へ乗り込んで、
無事に生命の水を得て来た事から、城中の有様まで詳しく話し
ました。

そういふ具合で、兄弟三人互に喜び合つて、まあとに角一所に
早く歸らうといつて、馬を並べて道を急がせました。

所が、此兄さんたちは、一體元から心がよくないのでせう、夫
で、弟の三郎に自分たちが助けられた事は有り難いとも思はな
いで、たゞく三郎に功をせられたのを残念に思つて、若し此
儘、國に歸ると、お父さんは、屹度、三郎を可愛がつて、彼に
後をお譲りになるに違ないから、どうにかして、自分たちの功
にしたいものだなど、とんでもない悪い事を考へて居るので

す。

そして、だんくやっつて参ります中、とうく或晩のこと、何も知らないで、三郎の眠つて居る折を窺つて、大事に持つて居た瓶を取り出して、其中の生命の水を、そーつと自分たちの瓶に入れて置いて、後へは鹹い鹽水を代はりに入れて置きました。

さて、其翌日 國に歸りつきましたから、三郎は大喜びで、お父さんの病床の間へ参りまして、早速 生命の水の瓶を取り出して、お父さんに上げました。

所が、お父様が、夫を一口お飲みになるといふと、御病氣の容体が、以前よりも、グツとお悪くなつて仕舞ひました。そこへ

太郎丸と次啓とが、やつて参りまして、じろくと三郎を睨み
 付けながら、お父さまの、こんなに悪くなつたのは、屹度三郎
 が毒をお飲ませ申したに違ないなど、飛んでもない事を言っ
 て、眞實の生命の水は、私らが持つて居るのだと言ひながら、
 やがて、殿様に飲ませた所が、忽ちの中に殿様の病氣が直つて
 仕舞ひました。

之は不思議と思つて、三郎は、自分の瓶の水を嘗めて見た所が、
 豈計らんや何時の間にか、鹹い鹽水と代つて居ましたので、何
 が何やら分らず吃驚したまゝ諦れて居りますと、太郎丸と次啓
 とは、殿様に申し上げて、『三郎は、不届な奴で、お父様を毒害
 しようとしたのですから、すぐ縛つて牢の中へ入れましよ』と

言ひますと。お父様も、夫を眞實だと信じて、非常にお怒りに
なつて、忽ち三郎を捕へて牢の中へ入れて仕舞ひました。
夫から、其翌る日になつて、殿様は一人の家來に申し付けて、
三郎を山の中へ連れ込んで行つて、其處で鐵砲で撃ち殺させ様
としました。

夫で、三郎は殺されるとは知りませんで、其家來と二人、馬に
乗つて、山の中へと行きました。所が、この家來といふのは、
大變忠義の心の深い人で、三郎を殺すことを言ひ付かつた事は
言ひつかつたですが、これは、三郎は全く無實の罪だといふこと
を知つて、どうにも可愛相で仕方がございませぬから、と一と
一三郎に向つて、今日の自分の役目を悉皆白狀して仕舞ひまし

た。

すると、三郎は非常に悲しんで、これは何でも、二人の兄様の企んた仕業に違ない、生命の水が鹽水に代つて居たのも、ひよつとかすると、矢張兄様たちのした事かも知れないと思つて、甚く歎きました。が、だんく時間が絶つからといって、家來が急がせますから、仕方なしに、先づ兎に角、この處を逃げることに決めて、自分の衣服と、家來の衣服とを取り代へて着て、人に見つからない様に、其夕方密と何所かへ逃げて行きました。さて、家來は一人で御殿へ歸つて、甘く三郎を殺した様に、殿様へ申し上げ様と思つて、行きました處が、御殿中は上を下へと大騒をやって居ます。夫は、太郎丸と次磨の二人が、丁度三郎

が山へ行つた頃から、御殿の眞中につゝ立つた儘急に身體も口も利かなくなつて仕舞つたといふことなので、殿様は勿論のこと、家來も醫者も吃驚して、寄つてたかつていろいろ手を盡しても、まるで死人の様に硬くなつて、さつぱり動き相にもないから、どうした事だろうと、皆が不思議ぶつて、大騒ぎをやつて居る所なりました。

家來は歸つて来て、丁度此有様を見て、心の中で、成程、之はひよつとかすると、此二人の兄様が惡企をして、其罰でこうなつたのだかも知れないと思つて、如何にも、罪の報といふものは恐ろしいもんだと思つて居りました。

すると、殿様も、餘り不思議でならないから、彼の家來を呼ん

で、其譯を尋ねました。そこで、家來は、これは三郎様を無實の罪に落した罰かも知れないといふ事を申し上げました所が、殿様も、先程から、三郎の冤罪を御思ひ附きになつて、餘り早く殺させた事を残念がつて居る所でしたから、家來は此處だと思つて、『實は、三郎様は殺しませんで、陰に逃がしてやりました』と申し上げました所が、殿様は大喜びで、『夫では、今からすぐに、三郎の行った所を採させねばならぬ』といふので、夫から大急ぎで、所々方々を尋ねさせました。

三郎は、そんな事とは知りませんで、誰にも見付からない様に山を出てだんく逃げて行きました所が、途中で、又々、例の一寸法師に出遭ひましたので、泣くくこゝまで來た譯を話し

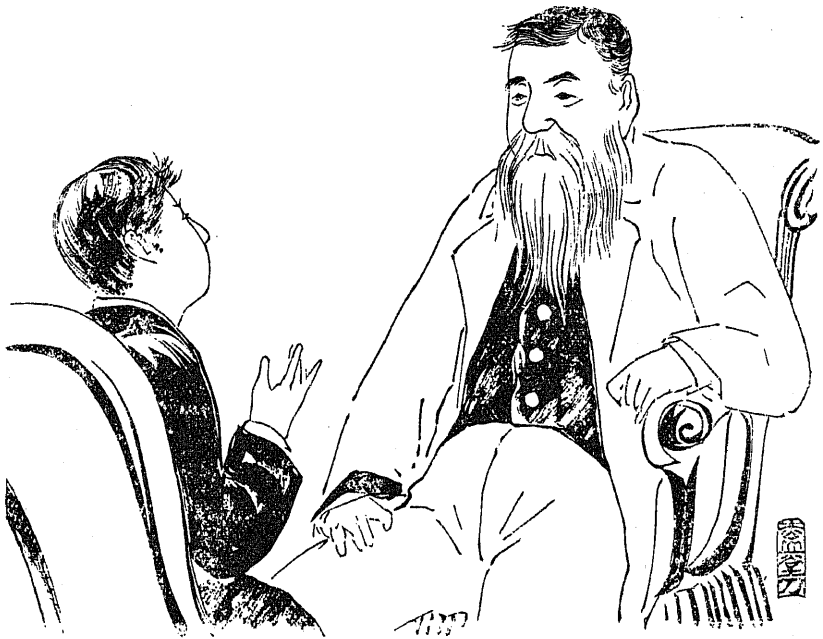
ました所が、一寸法師は

『はい、それは、太郎丸と次麿とが、お前を妬んで、途中で生命の水と鹽水とを入れ代へて、その上お前を殺さうと企んだのだ、だから、已は、あの二人を咒咀つて、御殿の眞中で、身體も口も利けなくしてやつて居るから、御殿中より大騒ぎで、殿様もやつとお前の冤罪を知ったから今に、お前を此處まで探しに來るに違ない』

といつて、又何處かへ消えて行きました。所へ案に違はず大勢の家來どもが、尋ねて來て、三郎の無事に居たのを見て、大喜びで連れて歸りました。

夫から、三郎が、御殿へ歸りまして、お父様に御目にかよつて、

さて、自分
 が生命の水
 を取つて來
 た事から、
 二人の兄さ
 んたちが、
 始め一寸法
 師を怒らし
 て其爲に咒
 咀はれて居
 たのを、自



十六
 分が願つて
 宥して貰つ
 て、連れて
 歸る途中で、
 生命の水と
 鹽水とを兄
 さんたちに
 すり代へら
 れた事から、
 今度の事ま
 で、詳しく

御話しました所が、お父様は、聞く毎に打ち驚く許りで「夫に
しても、憎いのは太郎丸と次譬とだ、はて、どーしてくれよ」
と言つて、非常にお怒りになつて、二人の立ちすくんで居る場
所へ行つて御覧になりますと、不思議なるかな、今迄石の様に
なつて居つた二人は、忽ち動き出して、ピタリと其處に平伏
して、今迄した事を、悉皆白状して「どーか、どんな重い罰に
でも宛て、下さい」と言つて、切りに後悔して居ますので、殿
様は、家來に言ひ付けて、直ぐ二人を牢に入れ様としました。
然し、三郎は

「自分のした悪事を後悔して、どんな罪にでも服すると申し出
ましたれば、もー夫で、罪が消えたと、同じ事だから、どーか、

私の功に免じて、二人をお宥し下さる様に」

と、切りにお願しましたから、お父様も、やっと、怒りを抑へて、二人を免されました。

夫からといふものは、二人の兄様は、全く弟の三郎の心立の宜いのに感心して仕舞つて、心からの善人になつて、三人の兄弟は何時までなく仲よくしましたとさ、めでたく、